

特集：2014年「音の日」

第21回「音の日」のイベントと 第19回「音の匠」顕彰について

「音の日」実行委員長 森 芳久

今年1月12日の成人式を迎えたのは126万人。これは、昨年より5万人多く21年振りの増加ということになります。この新成人の誕生と「音の日」の誕生は同じ1994年のことです。昨年12月の「音の日」のイベントは正に「音の日」の成人式でもあったのです。

この「音の日」は日本オーディオ協会が日本レコード協会や日本音楽スタジオ協会などの関連団体と連携して制定し、オーディオ文化や音楽文化の啓蒙活動を推進してまいりました。おかげさまで皆様のご協力によりここまで育ち「音の日」の認知も広がってまいりました。最初からこの「音の日」の活動に携わってきた者として、改めて関連団体の皆様そして会員の皆様に心より御礼申し上げます。

昨年第21回「音の日」のイベントは、12月5日（12月6日が土曜日のため一日繰り上となっています）目黒雅叙園にて開催いたしました。

この「音の日」の大きなイベントが、第3回「音の日」から始まり恒例となりました「音の匠」の顕彰と、その「音の匠」による特別講演です。昨年度は東海大学創造科学技術研究機構・特任講師、理学博士森阪匡通（もりさかただみち）氏を第19回「音の匠」として顕彰いたしました。森阪氏は「イルカの生息域に依存する鳴音（めいおん）の違い」など数々の発見や、「イルカの鳴音によるコミュニケーション方法の研究」など多くの論文を発表され、音によるイルカのコミュニケーションの実態を明らかにされています。文字通り「音とイルカの研究」における第一人者です。ご承知のようにイルカは低域から超高域までの鳴音を発して仲間との交信や、また水中での捕食や障害物の認知をしていると考えられています。そこは人の可聴帯をはるかに超えた新たな音の世界が広がっているのです。森阪氏は広帯域デジタル録音機を用い水中でこれらイルカの鳴音を収集分析し、そのコミュニケーションの仕組みを解明されてこられました。まさにこれは「音の匠」の世界です。

「音の日」には森阪氏により「音の世界に生きるイルカ、彼らは何をかたりあっているか」と題する特別講演をいただきました。実際に収録されたイルカの鳴音や水中映像を駆使し、またユーモアに溢れたその講演は、会場の聴衆を魅了しました。



顕彰後の記念撮影



「音の日」記念特別講演の森阪氏

その講演内容につきましては、JAS ジャーナル本号に森阪氏ご自身による寄稿を頂きました。是非そちらをご覧ください。

また、20周年を迎えた「音の日」を記念し「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」を開催いたしました。これは、日本オーディオ協会が特に若い世代にオーディオ文化を広め、健全な「音楽録音」と「再生音楽」の発展を期待して企画・開催したものです。応募資格は、音楽録音に興味を持つ学生個人またはグループとし2013年1月1日以降制作の作品を対象としました。

主催は日本オーディオ協会、共催オーディオエンジニアリングソサエティ日本学生支部、さらに昨年はソニー株式会社、ティアック株式会社、株式会社ヤマハミュージックジャパンなどの企業の協賛、オーディオエンジニアリングソサエティ日本支部の協力を得て実施しました。

このコンテストの審査委員は音楽録音の専門家、尚美学園大学芸術情報学部教授千葉精一氏（審査委員長）、東京芸術大学音楽学部教授亀川徹氏、名古屋芸術大学音楽学部教授長江和哉氏、ドリームワーク・インク深田晃氏、オーディオエンジニアリングソサエティ日本支部中村寛氏、日本オーディオ協会理事高松重治氏にお願いいたしました。

昨年は17の応募作品があり、最優秀賞に尚美学園大学大学院生 蒙昕晨(モウキンシン)さん、音楽賞に名古屋芸術大学大学院生 松永麻耶さん、企画賞に東京芸術大学生 鈴木勝貴さん、録音賞に日本工学院専門学校生 笹川景太さんが選ばれました。表彰式の後、オーディオ協会諮問委員の穴澤健明氏の司会で審査員と受賞者によるパネルディスカッションが行われ、それぞれの作品についてのコメントや受賞者による制作意図など白熱した議論が行われました。



詳しい内容につきましては、穴澤氏による「学生の制作する音楽録音作品コンテストについて」をお読みください。

このコンテストは初めての試みでしたが、応募者、審査員また会員の皆様からも非常にポジティブなご意見をいただきましたので、今後も定例として開催することといたします。

ご協力いただきました関係団体・企業の皆様、審査員の先生そして応募者の方々、ほんとうにありがとうございました。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。